

§ 1 日本語教育史の視座変容・拡大の必要性（言語→communication）

- ① 言語・教授法（文化庁 1985 日本語教員養成「通称 420 時間課程」）
- ② 人の移動・接触にともなう communication（文化庁 2000「日本語教員養成に必要とされる教育内容」）

§ 2 中世前期（唐滅亡以降～元代）における私貿易の拡大・中国における日本語の認知

- ・唐代：894 遣唐使廃止。907 唐滅亡 → 民族文字：日本仮名文字、契丹文字、西夏文字（『吾妻鏡』：女真文字 4 字を記載（1224 条））。
- ・宋代：私的自由貿易策 → 平氏日宋交易。1251『鶴林玉露』中国字音で日本語数語を記す。
参考：宋徽宗大觀政和年間蕃坊に〈シニユウ+不〉設立為外商子女学習の蕃学。
- ・元代：1206 大モンゴル建国、1271～1368。銀による 超国家 広域経済。参考：1293 フランチェスコ派コルヴァイノ北京で基督教布教。
14c 後半『書史会要』、かな 47 文字を紹介。

§ 3 中世前期の日本 私交易 system 下におけるバイリンガル

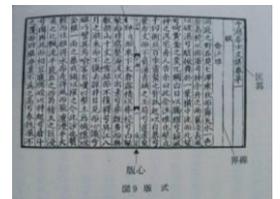
◇博多における通事（日本語・中国語バイリンガル）・日本-中国間 net work の存在

- ・博多唐人町の大唐通事：847 唐人張友信（造船、交易力をもつ）、博多で大唐通事に就任（日本三代実録）。張の留守時は唐僧法恵張が通訳。
- ・中国系移民の日本-故郷間の net work：1167 丁淵（博多）、張寧（太宰府）、張公●<吉の下に心>（福建省出身、日本居住）の 3 人が、寧波の「寺の石敷道建設資金各銭 10 貫を日本から寄進」と寧波石碑に記録。
- ・能「岩船」金春流：「市人を見れば、姿は唐人なるが、声は大和詞なり。…御身はいかなる人ぞ。」

◇バイリンガル育成に関する痕跡

- ・接触自然習得型学習：850 頃、徐公直（唐の役人〈衙前散将〉兼対日貿易家『資治通鑑』）が子どもを日本の唐僧義空に預ける。
- ・国際結婚＝家庭内・日本社会での言語の両語獲得：1220 宗像大宮司氏忠は妻が張氏（宋人）、母が王氏（宋人）。
- ・能「唐船」：中国人祖慶官は、日本船で福岡箱崎に連れて来られた。13 年後中国に残された子供が父を連れて帰るため来日。父は喜ぶが、日本生まれの子は引き留める。主人は、日本の子も唐土へ連れて帰ることを許し、父子 5 人は中国に帰って行く。
→communication：①祖慶官自身の言語・日本社会との communication 用語は？ ②日本生まれの子の獲得言語は？ ③日本生まれ・中国生まれの子の間の communication は？ ④中国到着後に日本生まれの子は、日本語使用の機会があったか？

- ・禅寺における日本人禅僧と中国渡来僧の共同生活・言語の自然習得：『竺仙和尚語録』（渡来僧と日本僧の問答記録）には、「寿（日本僧）その舌音を却転し、日本郷談をなして云う」（日本僧が問答を中国語から日本語に変え、話し出した）ところ、渡来僧も「亦日本語を操りて云う…」と渡来僧の日本語会話に参加していく様子が描かれる。



§ 4 中世後期（明代）における公（朝貢）貿易の再興・中国における日本語の認知

- 明 1368～1644：中華再興（銀経済否定・公朝貢貿易）期 → 銀経済回帰期（私貿易〈倭寇〉）。
- ・朝貢再興期における外国使節宿泊・外交文書取扱所として「四夷館」設置：1407「韃靼、女直、西藏、西天、回回、百夷、高昌、緬甸」8 館、後に「八百館、暹羅館」。
- 外国語管理としての『華夷訳語』：朝貢関係書簡対訳 system：乙種本は「来文」「原文字・その漢字音・漢訳」で構成。
四夷館通事定員 1469：ペルシア語 7、モンゴル語 7、女直語 7、雲南百夷等處 6、西藏語 5、朝鮮語 5、日本語 4、琉球語 2、暹羅語 3、占城語 3、畏兀兒語 2、安南語 2、爪哇語 2、真臘語 1、マッカ 1、河西語 1、緬甸語 1。

・日本語：

	経済政策	朝貢にともなう言語政策	日本語（寄語研究）	日本勘合貿易
元	銀広域（超国家）経済		14c 頃 『書史会要』平仮名	
明	1385-1420 代銀経済否定期	1370 寧波市舶司日本〈懷良親王〉管轄。 1407 四夷館・『華夷訳語』		1383 琉球北山王朝貢 1392 福建出身者を琉球派遣 1402 義満、明国書を受ける 1403 市舶司〈寧波＝日本〉 1404 義満、勘合貿易 19 回 -1549
	15c-銀経済回帰期	1469 会同館 日本語通事定員 4 人	1522 『日本考略』 360 語	
	1540 代-石見銀導入期 1565 国家決済を銀で行う	1549 『日本館訳語』 566 語	1561 『日本図纂』 1562 『籌海図編』 1566 『日本一鑑』 3400 語 16c 『日本考』和歌 51 首	1549 勘合貿易停止

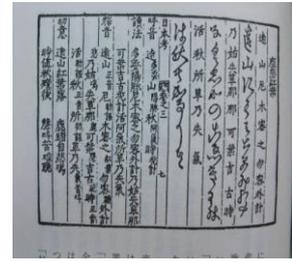
- ① 日本語関係は、四夷館設立期より遅く、1469 の通事定員中に 4 人、1549 『日本館訳語』 566 語として登場する。
- ② いわゆる「寄語研究」は、<銀経済回帰期の『日本考略』>と、<石見銀の中国への導入期以降の書物>に分かれる。
- ③ 『日本考略』：寧波争貢事件 1523（細川・大内氏間の寧波港内での交戦）・1526 博多商人神谷寿貞の石見銀山発見と前後する時期に作成されており、日本情報を直接得るために作られたと判断する。

④ <石見銀導入期以降> :

- ・官軍による後期倭寇拠点の双嶼港 1548、烈港 1553 掃討。
→後期倭寇(王直、李旦<Andrea Dittis>、鄭芝龍<ニコラス>) 拠点を日本に移動、私貿易継続。
- ・1550 巡按広東監察御史王紹元「海上交易による利益(日本銀<長谷川注>)は民間に流れているが、官が取り戻す必要がある『日本一鑑』」。
→後期倭寇の中国帰順説得使節の日本派遣。使節による日本・日本語情報の直接収集⇒著作(説得使鄭舜功著 1566 頃『日本一鑑』。王直説得使蔣州からの聴取を鄭若曾が著 1561『日本図纂』・1562『籌海図編』著)。

⑤ 『日本考』16c : 和歌 51 首の漢訳。書式が『華夷訳語』系に類似。

- ・かな連綿体表記の和歌→漢字を用い発音・意味の理解。
- 漢字表記のまま意味が理解できる語(遠山{おくやま})
- かな文字を元漢字に直し、中国語訳をつける({あき}阿気→秋)
- 上記外の残余の語(助詞など)を「助語」と分類、機能分析はしていない
- ・ゴール: ○~○→和歌を漢詩に翻訳理解(写真左端)。
- ・文法より「語」に重きを置いた発想。

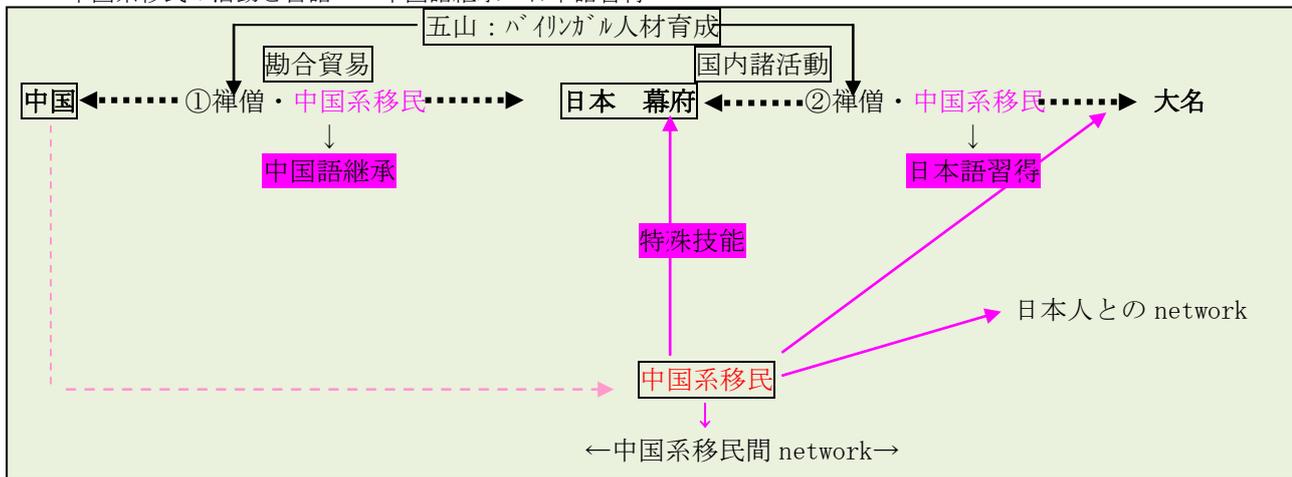


寄語研究例:『日本考』16c

§ 5 中世日本(室町期)における中国系移民・日本社会間の net work から考える 日本語習得・母語継承の痕跡

◇ 日本社会における 中国系移民の 行動net と 日本語習得・母語継承

- ・勘合貿易: 1404~1549、19 回、通事(禅僧 中国系移民) 交易品(硫黄の比重大)
- ・通事(バインガル) 人材
 - ・禅僧 日中僧共同生活 ⇒ 下図①②の活動
 - ・中国系移民の活動と言語 ⇒ 中国語継承・日本語習得



◇ 勘合貿易遣明船における 通事の業務

- ・1453: 東福寺臨濟僧斯立光幢、硫黄産地に赴き、硫黄の確保調達輸送、乗船渡海。「来文」起草など実務担当。
- ・1465: 幕府、都から陳外郎を派遣、大友に指令・集荷をさせる『戊子入明記』。硫黄 4 万斤(内 1 万斤=中国皇帝に寄進、3 万斤=商い用)。3 隻 400 人、波寧。4 月後北京より入京許可書→半年後北京=礼部に入貢。北京: 玉河館滞在、中国側に大通事(日本語? 1469 日語通事 4 人)がいた。竜自作彦修了『柵日子乳明記』
- @陳外郎くういろう>: 陳氏=外交交渉、通訳、医術に長ける。1481 薩摩下向時には、薩南派臨濟僧庵玄樹と漢詩の交換。
- ・外郎は、官職名「礼部員外郎」に由来する。外郎薬: 小田原外郎家で作られる、形・原料が仁丹に似た丸薬。
- ▽1544 大友船、「勘合、来文」をもたず渡海 3 回 ⇒法的には私貿易・和寇 →大友船は寧波で入港不許可→双嶼で密貿易。

◇ 中国系移民 - 日本社会との交流・共生 -

▽「特殊技能(絵画知識・漆喰・医学)」の提供

- ・中央→大名→中国系移民=中央での「漆油・漆喰」技能提供:
 - 1588「しっくいぬり候唐人…当国ニこれ在るの由に候間、早々に申し付け、差ししすべく候 秀吉朱印 嶋津修理大夫とのへ」。この指令は大友氏にも来ており、大友は 1588 陳元明を上京させ、方広寺で「大仏木造仕立て漆油続き立て」の技術提供をさせた。1589 再上京、しっくい技術の奉仕を行い、「御褒美として国役御免…(秀吉朱印) 陳元明」を受けている。
 - @陳家: 一族で渡来、日本人と結婚し、分家が多い。言語の問題: 母が日本人の場合=日本語 native。業務関係の中国語継承は?

▽領内「絵画」知識の披露

- ・樹岩見山: 城下唐人町居住、絵画専門知識を持ち、輸入画材も扱う商人。<海外産品の知識>、<「港」(工業機能)・「寺院」・「大友家」の輸入資材に対するニーズ>の両面を知り、「輸入業=中国語/対日本人販売=日本語」のバインガルとして活動。
- ・1571「大友宗麟が白牡丹生城築城の際、都より狩野永徳・宗秀を招き、唐絵を描かせるが、狩野作成の絵の中国人描写に誤りのあることを 明渡来の樹岩見山が指摘。永徳らは、見山から中国絵画の神髄を聞き、絵を修正した」『大友興廃記』。

▽日本人社会との「共生活動」

- ・「お伊勢参り」：「天正十六年参宮帳」（御師福嶋御塩大夫指導の伊勢参宮者リスト 1588-91）：府内参加者 72 人を記録。内唐人町の参加者=11 人（例：「けんさん」=樹岩見山）で、「与三郎」のように日本名化している者も交る。日本人と一緒に伊勢参りをするという交流活動の存在が知れる。
- ・中国系移民の日本人社会の祭祀に対する寄進：豊後府内明人、府中今小路惣道場に梵鐘寄進。道場は、唐人町西側の称名寺、寄進日は、「大風流」祭翌日の盂蘭盆会の日で、日本人行事への協力支援活動が存在する。「大風流」は、唐土、天竺、南蛮、高麗の綾羅錦繡をもって飾りたて踊る行事（大友家『当家年中作法日記』）。

◇ 中国系移民 —その後—

- ・中世前期の私貿易下において形成された日中バリエーションは、中世後期（明代・室町期）においても継続し、中国系移民は対外的には公（勘合）貿易における通事活動を担う。対国内活動としては、特殊技能の提供・日本社会の行事への参加などの共生活動を行っている。この活動を言語の面から考えると、「第 1 世代においては第 1 言語である中国語の能力を生かした通事活動と習得した日本語を駆使しての日本人貿易担当者との communication が行われており」、次いで「第 2 世代以降については日本社会で成長する過程で自然習得した日本語と移民系の家系がもつ特技を継続していくための中国語継承の問題」の 2 つの相が存在する。今後はこれらがどのように存在したのか、相互に関係をもつのかを考察していく必要がある。
- ・中世後期は公貿易（勘合）と私貿易（後期倭寇の活躍）の拮抗する時代であり、後者は日本銀をめぐる動きでもあるが、日本語の面から見ると、後期倭寇の取締り・中国帰順説得使節の来日が「寄語（日本語）研究」を促進させるところとなった。
また、中国帰順説得は逃亡倭寇に発せられただけではなく、逃亡倭寇を居住させていた日本に対しても強要され、説得が叶わぬ場合は朝貢を拒否する旨が謳われ（『日本一鑑』）た。日本は逃亡倭寇を説得せず、勘合貿易は終焉を迎える 1549。中国系移民にとっては「私」貿易のトバッチリを喰らって、「公」貿易における通事活動の場を失ってしまったことになり、その後の鎖国もあって、中国系移民は日本人社会の中に埋没・融合していく。

<参考・引用文献>

- 伊藤幸司, 2002, 『中世日本の外交と禅宗』, 吉川弘文館
上田信, 2005, 『中国の歴史 9 海と帝国』, 講談社
鹿毛敏夫, 2015, 『アジアのなかの戦国大名 西国の群雄と経営戦略』, 吉川弘文館
須田牧子, 2011, 『中世日朝関係と大内氏』, 東京大学出版会
中島楽章, 2004, 「十六・十七世紀の東アジア海域と華人知識層の移動」『史学雑誌』 113-12
橋本雄, 2005, 『中世日本の国際関係』, 吉川弘文館
濱下武志, 1999, 『東アジア世界の地域ネットワーク』, 山川出版社
三宅俊, 2005, 『中国の埋められた銭貨 世界の考古学 12』 同成社
山内晋次, 2009, 『日宋貿易と「硫黄の道」』, 山川出版社